

阿波國府跡発掘調査報告書

1999. 3

徳島市教育委員会

阿波國府跡発掘調査報告書

1999. 3

徳島市教育委員会

序 文

徳島市の西部に位置する国府町には、数多くの文化遺産が残されています。銅鐸が出土した弥生時代の集落遺跡として、全国的にも著名な「矢野遺跡」や標高212mの気延山に点在する古墳群、また、古代以降は阿波國府跡推定地や阿波國分寺跡など、阿波国の中心として、また歴史と文化の発祥の地として貴重な文化遺産を育んできた地域であります。

中でも、阿波國府跡につきましては、これまでにその所在確認等の調査実施の経緯がありますが、未解決の部分を数多く残した遺跡の一つであります。

今回、阿波國府跡確認調査を国補事業として再開することになりました。

本書は発掘調査の成果を報告書としてまとめたものですが、阿波國府跡の解明へ向けて、その研究の場に微力なりとも寄与することができれば、幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御理解と御強力を賜りました関係各位に深く感謝申しあげます。

平成11年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 柏木雅雄

例　　言

- 1 本書は、徳島市国府町矢野において実施した阿波国府跡発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、平成10年度国宝重要文化財等保存整備事業「阿波国府跡発掘調査」として実施した。
- 3 調査期間、調査面積は下記のとおりである。

調査期間

平成10年11月1日～平成11年3月31日

調査面積

700m²

- 4 発掘調査および整理作業は徳島市教育委員会が主体となり実施した。

現地調査・整理作業

調査主任

勝浦 康守（徳島市教育委員会社会教育課）

調査員

倉佐 晃次、中野 勝美

調査補助員

稻岡 勝記、稻岡 知美、稻岡 建治、稻岡るり子、森本 和栄、佐藤 安孝、
吉岡 ミヨ、切原美佐子、藤村 友彦、青木 健司、折野 絵美、山口 文子、
露口 啓子、吉田 純子

- 5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収録・保管する。

- 6 本書は以下の分担で作成した。

製図・トレース・写真撮影・レイアウト

倉佐、中野、折野、山口、露口、吉田、勝浦

執筆・編集

勝浦

目 次

序文

例言

目次

本文目次

1 調査に至る経緯.....	(1)
2 調査方法と調査経過.....	(2)
3 基本層序.....	(4)
4 出土遺物（1・2層）.....	(4)
5 検出遺構と出土遺物.....	(11)
6 小 結.....	(22)

挿図図版

写真図版

挿図図版

- 第1図 調査地位置図
第2図 調査地概略図
第3図 堆積土層図
第4図 出土遺物(1・2層)
第5図 出土遺物(1・2層)
第6図 遺構配置図
第7図 溝SD01出土遺物
第8図 溝SD01出土遺物
第9図 土壌SK01遺物検出状況図
第10図 土壌SK01(55~61)、
SK02(62~67) 出土遺物
第11図 土壌SK02遺物検出状況図
第12図 土壌SK03遺物検出状況図
第13図 土壌SK04遺物検出状況図
第14図 土壌SK03(68~74)、SK04(75)、
SL01(76~81)、SJ01(82)、
3層(83) 出土遺物
- 図版8 上：土壌SK01遺物検出状況
下：土壌SK01遺物検出状況
図版9 上：調査地I区土壌SK02検出状況
下：土壌SK02検出状況
図版10 上：調査地I区土壌SK03遺物検出
状況
下：土壌SK03遺物検出状況
図版11 上：調査地II区土壌SK04遺物検出
状況
下：土壌SK04遺物検出状況
図版12 上：調査地III区分銅形土製品検出
状況
下：銅形土製品検出状況
図版13 出土遺物(1・2層)
図版14 出土遺物(1・2層)
図版15 出土遺物(1・2層)
図版16 出土遺物(1・2層)
図版17 溝SD01出土遺物
図版18 溝SD01(51~54)、
土壌SK01(55~59) 出土遺物

写真図版

- 図版1 調査地I区遺構検出状況
図版2 調査地II区検出遺構
図版3 調査地III区遺構検出状況
図版4 上：調査地1-A掘立柱建物跡SH06
と周辺条里地割
下：掘立柱建物跡SH06検出状況
図版5 上：掘立柱建物跡SH06桁行柱穴検
出状況
下：掘立柱建物跡SH06梁行柱穴検
出状況
図版6 上：調査地I区溝SD01検出状況
下：溝SD01遺物検出状況
図版7 上：調査地I区土壌SK01検出状況
下：土壌SK01検出状況
- 図版19 土壌SK01出土遺物
図版20 土壌SK02出土遺物
図版21 土壌SK03出土遺物
図版22 土壌SK04(75)、周溝墓SL01(76~81)、
土壌墓SJ01(82)、3層(83)
出土遺物

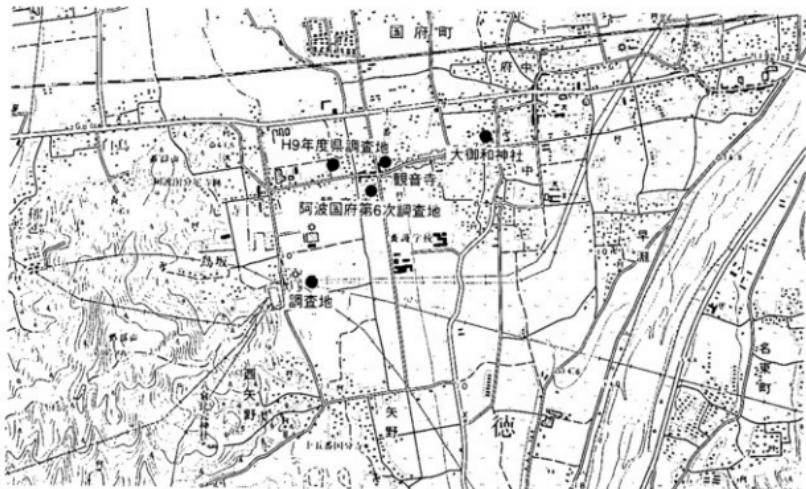
報告書抄録

ふりがな	あわこくふあとはつくつちょうさほうこく						
書名	阿波国府跡発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	勝浦康守						
編集機関	徳島市教育委員会						
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418						
発行年月日	西暦 1999年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道緯度号	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
阿波国府跡 矢野遺跡	徳島県徳島市 国府町			34度 3分 34秒	134度 28分 25秒	19981101～ 19990331	700 国補事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
阿波国府跡 矢野遺跡	集落跡 官衙跡	弥生 古代	堅穴住居跡 方形・円形周溝墓 土壙・土塙墓・溝 掘立柱建物跡・溝 土壙	弥生土器 分銅形土製品 土師器・須恵器 黑色土器・製塙土器 甕・瓦			

1 調査に至る経緯（第1図）

阿波國府跡の所在地および規模については歴史地理学からの諸研究があり^{(1)～(3)}、徳島市教育委員会も先学の研究に基づき、国府町府中の大御和神社を中心とする地域において、昭和57年度から10ヶ年の継続事業として重要遺跡確認調査阿波國府跡の発掘調査を進めてきた経緯がある^{(4)～(8)}。この10ヶ年の調査成果には、從来から指摘されてきた大御和神社を中心とする国府域の推定が疑問視されたこと、そして第6次調査における成果から、大御和神社から西へ500mに所在する16番札所の「観音寺」を中心に推定域を設定する方向へと転換したことが挙げられる。ただし第6次調査以降の「観音寺」を中心とする地域で実施された調査においても、阿波國府跡に関連する良好な遺構検出事例は見られず、また第6次調査での出土資料の主体は10世紀代に至るものであり、国府継続期間のある一時期を示すに過ぎないなど、阿波國府跡に関する問題は数多く残された。

このような状況下、平成9年度に観音寺から西へ250mの地点において実施された徳島南環状道路建設工事に伴う観音寺遺跡の発掘調査（県）において、自然河道より大量の土器・木製品が出土している。中でも出土木簡は7世紀前半～8世紀代のものとされ、国府成立前あるいは成立後の間もない時期の貴重な資料である⁹⁾。これは第6次調査以降提唱されてきた、観音寺周辺における阿波國府跡中心施設の存在の有力性をより高める結果となっている。ただ現状資料は固まりつつあるが、非常に残念なことは国府跡中心施設に相当する遺構検出が未だ成されていないことである。



第1図 調査地位置図

また、観音寺遺跡発掘調査（県）の前年度、「観音寺」から南西へ600m隔てた矢野字せんだんの木における市道改良工事に伴う発掘調査（市）では、8世紀前半の大型掘立柱建物跡群が方1町内に広がる可能性を考え、しかも建物跡群は周辺条里に合致しない正方位を指向することから、初期国府の中心的な施設としての存在を想定している¹⁴。

今回の調査は平成8年度の調査成果から導き出される幾つかの状況（仮説）を詳細に検証するためのものであり、もちろんその背後には阿波國府跡との繋がりを明確にすること目的としている。

2 調査方法と調査経過（第2図）

調査は700m²を対象としたトレンチ調査である。トレンチの設定については、平成8年度の調査時に検出した柱穴群が西域において何らかの構造物群を構成するものと想定し、それらの広がりを確認するため、方1町内の北域において東西方向、東域において南北方向のトレンチを3か所（調査地I～Ⅲ区）設定した。

調査は現代水田耕作土を重機掘削で除去し、以後、遺構面まで人力掘削において包含層を除去し遺構検出を行った。

調査地I～Ⅲ区の遺構の性格および時期的な問題については、検出段階で概ね把握されている。検出遺構の中で目立つものに弥生時代中期の竪穴住居跡、周溝墓（方形・円形）や土壙墓また後期・庄内式併行期の竪穴住居跡が見られ、調査地に西接する四国電力国府変電所周辺域に広がる弥生時代の集落遺跡である「矢野遺跡」の性格が概ね強く出ている。調査の目的が国府跡に関する古代の遺構を主眼としたものであることから、遺構調査直前の文化庁との協議において、検出遺構の内、弥生時代後期・庄内式併行期の諸遺構については、基本的には遺構調査を実施せずに現状保存の措置を講じた。ただし遺構検出時に遺物出土が顕著な遺構、また時期の特定が困難な遺構については選出し調査を継続した。

このように当初に設定したトレンチI～Ⅲ区において、国府跡に関連するであろう古代の遺構検出は数少ない。これは遺構検出に伴う包含層の除去段階から、当該期の遺物出土の稀少さからある程度予測されたことではあるが、結果的にⅡ・Ⅲ区では遺構検出は皆無に終わっている。またI区では溝・土壙が検出されているが、平成8年度調査時に検出された規模の大きな柱穴掘形は確認されていない。I区ではこれらの遺構の広がりおよび性格を確認するため部分拡張および調査地1-Bの設定を行っている。さらに平成8年度調査時の柱穴掘形の性格確認のため、調査地1-Aを新たに設定し調査を実施した。調査地1-Aでは柱穴の広がりを確認し、掘立柱建物跡としての確証を得ている。ただし建物跡が調査地外へさらに広がることが予測されたため、現状において調査を進行させるよりも再調査による遺構の全容把握が望ましいとの判断により、遺構確認にとどめ調査を終了した。



第2図 調査地概略図

3 基本層序（第3図）

調査地周辺の現地表面はT.P.+9mを測り、調査地I区付近が最も高く周辺部に対し緩やかに傾斜する。調査地I～III区における基本層序は、ほぼ連続的に層位が対応され、現代水田耕作土（0層）下に1～4層が堆積する。以下、上位より概略する。

0層：現代水田耕作土

1層：層厚20cmを測る灰色シルトと黄褐色砂質シルトの互層堆積である。旧水田耕作に伴う土壤の酸化還元作用に伴う色調変化によるものである。調査地I区では堆積が認められない。弥生時代～中世の遺物を含む。

2層：層厚20cmを測る黒褐色砂礫混じりシルトである。調査地I区の全域およびII区の北側において堆積が認められる。弥生時代後期・庄内式併行期の遺物包含層であり、削平が予想される。包含層掘削時にこれらの遺物と混在して古代以降の遺物が出土している。おそらく2層上面において検出される（本来の切り込み面は上位である）べき遺構内遺物の可能性が高い。遺構検出ベース層と遺構埋土の識別の困難さから生ずる調査法上の問題点である。

3層：層厚10～20cmを測るにぶい黄色砂質シルト（含礫）である。調査地II区の北側～III区全域にかけて堆積が認められる。上位にMnの集積汚染が顕著であり、1層の灌漑水田耕作の影響と考えられる。弥生時代中期の遺物包含層である。

3-a層：層厚10cmを測る灰オリーブ色砂質シルト（含礫）である。調査地III区において認められる。3層と同一層であるが、Fe汚染の割合が少ない。

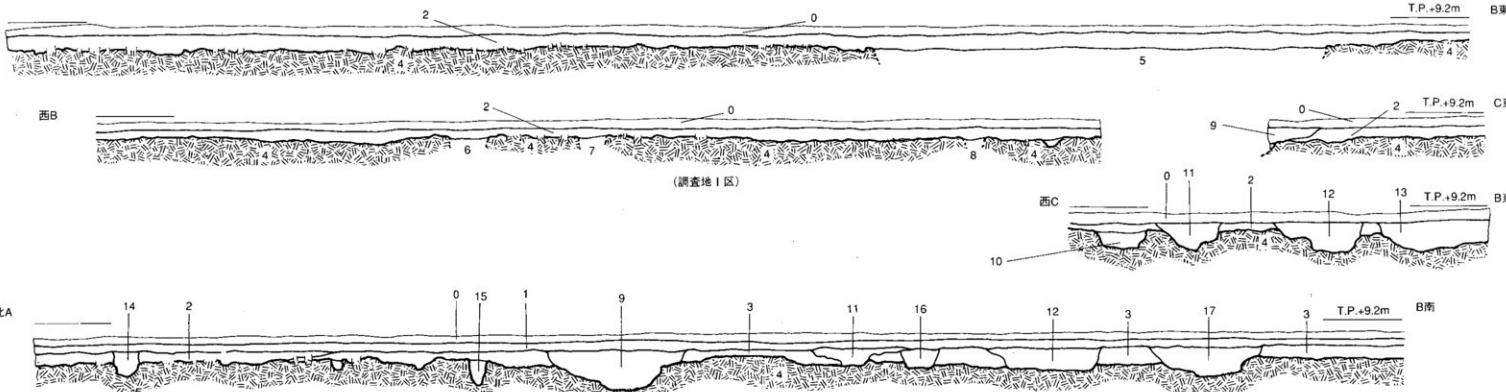
4層：浅黄色～灰黄色～黄褐色～黒色シルト～砂礫混じりシルトの遺構検出ベース層であり、調査地I区とII・III区では様相が異なる。I区では砂礫層が主体であるが、II・III区では上位に黄色系のシルトが堆積し、レベル低下に伴い砂礫層へ漸移的に変化する。旧鮎喰川水系による調査地周辺の旧地形の形成過程において、I区付近において最も高レベルで礫層が形成され、レベルが低下する周辺部（II・III区）にかけては礫層上にシルト層の堆積が成されたものと想定される。

4 出土遺物（1・2層）（第4・5図、図版13～16）

基本層序において概略した1・2層出土遺物の中で、古代の遺物について概略する。

出土遺物には土師器坏（1～11）、高台付坏（12）、皿（13～16）、甕（28、29）、須恵器蓋（17）、坏（18）、高台付坏（19～23）、皿（24）、壺（25）、製塩土器（26、27）、甕（30～33）、瓦（図版16-a～c）がある。

西A



◎基本層序および造構埋土の細分層されるものについては路式化した。

また、不完振の造構埋土については埋土上層部で識別した。

(基本層序)

0: 現代水田耕作土

1: 灰色シルトと黄褐色砂質シルトの互層堆積

(旧水田耕作に伴う土壤の酸化還元作用による。弥生時代～中世の遺物を含む)

2: 黒褐色砂礫混じりシルト (弥生時代後期・庄内式併行の遺物を含む)

3: にい黄色砂質シルト

(含鉛。上位にMnの集積汚染が顕著。弥生時代中期の遺物を含む)

3-a: 灰オリーブ色砂質シルト

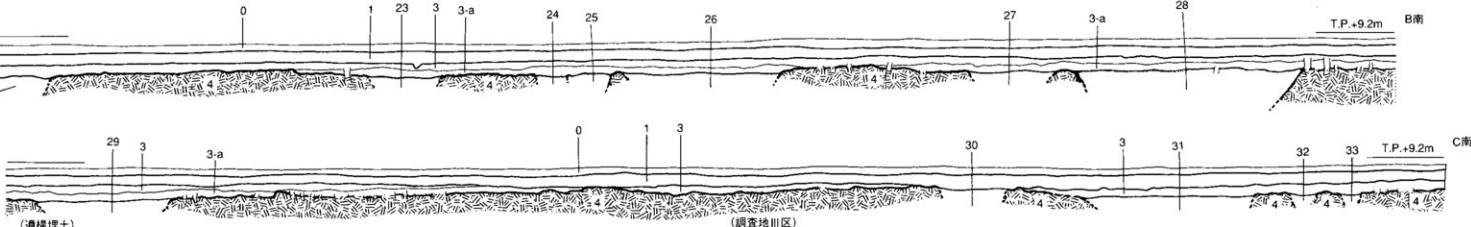
(含鉛。上層と同一層であるが、Fe汚染の割合が少)

4: 浅黄色～灰黄色～黄褐色～黑色シルト～砂礫混じりシルト

(I区では礫層が主。II区では上位にシルトが堆積するが
レベル低下に伴い礫層へ変化する)

北A

22



5: 黒色砂礫 (壁穴住跡)

6~8: オリーブ黒色シルト

9: 淡黄色砂質シルト (含鐵。SD02)

10: 淡黄色砂礫混じりシルト (土壤)

11: 淡黄色～黒褐色シルト (SD03)

12: 淡黄色～暗灰黃色シルト～細・粗砂 (SD04)

13: 暗灰黃色砂礫混じりシルト

14: オリーブ褐色～暗灰黃色砂礫混じりシルト

15: にい黄色シルト

16: 暗灰黃色砂質シルト

17: 淡黄色砂礫混じりシルト (SD05)

18: にい黄褐色～暗青褐色砂礫混じりシルト (SD06)

19: 淡黄色砂質シルト

20: にい黄色砂質シルト (SL02周溝)

23: 暗黃色砂質シルト

24: にい黄色砂質シルト

25: にい黄色砂質シルト (SL03周溝)

31: 黄褐色砂質シルト

26: にい黄色砂質シルト (SL01周溝)

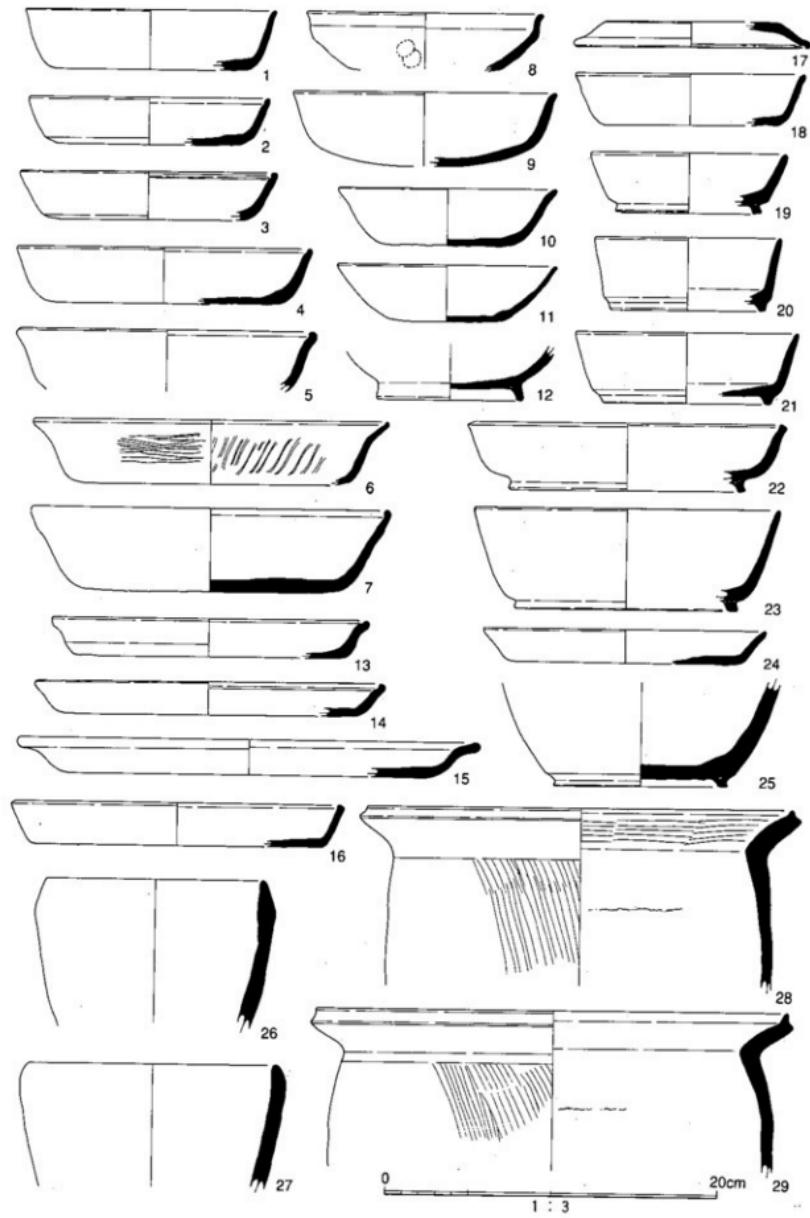
27: 淡黃色砂質シルト

28: にい黄色砂質シルト (SL01周溝)

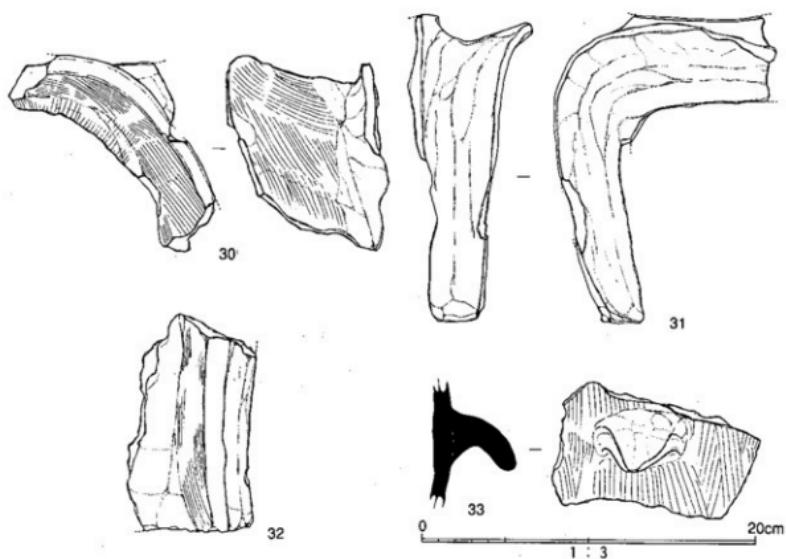
29: にい黄色砂質シルト (SL06周溝)



第3図 堆積土層図



第4図 出土遺物（1・2層）



第5図 出土遺物（1～2層）

土師器坏1～5は底部から短く直線的に斜め方向に立ち上がる皿形化した形態であり、口縁端部を丸くおさめるもの（1）と端部内面を肥厚させるもの（2～5）があり、いずれも回転台土師器である。

坏6は体部上位で外反し口縁端部内面を肥厚させ、体部外面には横位ヘラミガキ、体部内面には斜放射状暗文が施される。

坏7は底部から直線的に立ち上がり口縁端部内面を肥厚させる。底部には丁寧なナデが施されている。

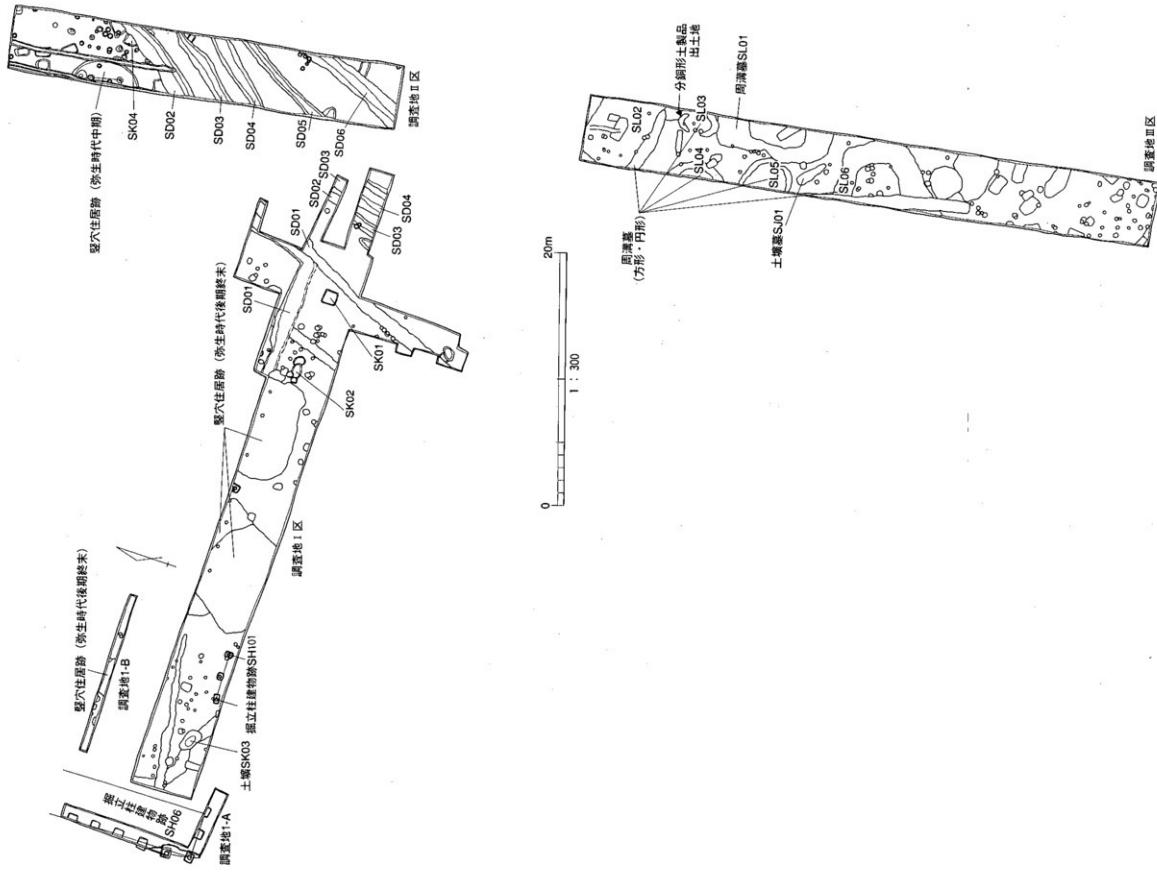
坏8は丸みをもつ体部から屈曲し口縁部に至り、体部外面にはユビオサエの痕跡が見られる。胎土および手法から搬入品と考えられる。

坏9は底部から丸みをもち立ち上がり口縁端部は丸くおさめる。胎土に砂粒を多く含み特異である。

坏10、11は底部から外方向に直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部を丸くおさめる回転台土師器である。坏1～9とは時期的に異なるものと考えられる。

皿13、14、16は口縁端部内面を肥厚させるが、15は「て」字状口縁を呈し端部を丸くおさめる。

皿16は底部からの立ち上がりの屈曲が明瞭である。



第6図 遺構配置図

皿13、14、16と15は時期的に異なるものと考えられる。

なお、土師器壺1～3、5、皿13、14、16には赤色顔料塗彩の痕跡が見られる。

土師器壺28、29は口縁部端面が凹面を呈し、端部を上方へ摘み上げ風に仕上げる。28は口縁部内面に横位の粗いハケ、外面には共に縱位の粗いハケが施されている。

須恵器高台付壺は底部端に断面形が逆台形あるいは方形の高台を付けるもの（20、21、23）と底部端のやや内側に踏ん張る形態の高台内面に接地点をもつもの（19、22）がある。

高台付壺19の高台端部は凹面を呈し、22は口縁端部を面取る。

製塙土器26、27は砲弾形を呈する。

竈30～32には燃焼の痕跡が見られない。36は内面調整に粗いナデが施されている。33は竈の取手部であろう。

5 検出遺構と出土遺物

(1) 掘立柱建物跡

① 掘立柱建物跡 SH06（第6図、図版4、5）

調査地1-Aにおいて遺構確認として検出している。平成8年度調査において建物跡SH06として想定したものである。平成8年度調査において桁行2間（2.1m等間）を検出しており、それを含めると桁行5間+α（北側に広がる可能性がある）、梁行2間の正方位指向の南北棟の掘立柱建物跡である。柱穴掘形の平面形は一辺80cmの方形あるいは長辺80cm×短辺70cmの長方形を呈する。柱間隔は西側桁行が南から2.1-2.1-2.1-1.8-1.8m、南側梁行が1.8m等間を測る。桁行南から3間目までは2.1m等間であるが4間目から変化する。建物構造上に関する柱配置の変化の表れであろうか。

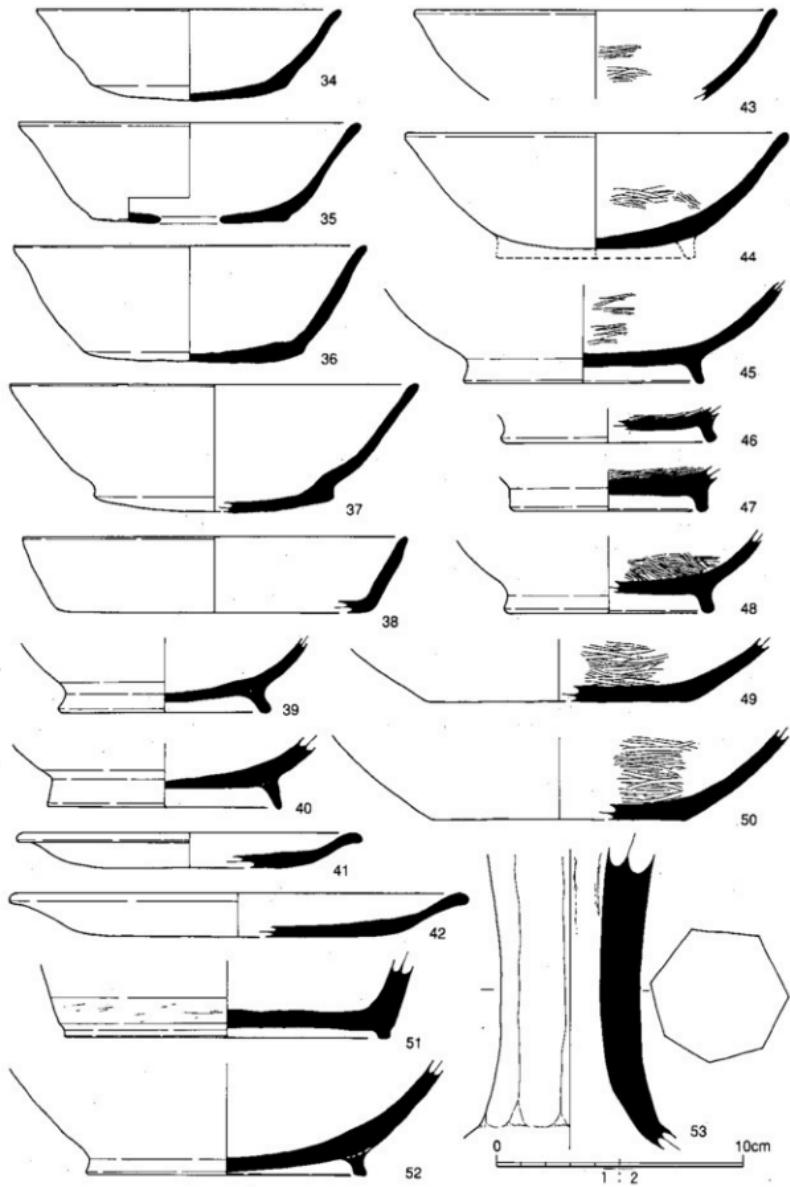
② 掘立柱建物跡 SH101（第6図）

調査地I区において2間分を検出し、I区南側へ広がる正方位指向の南北棟の建物跡であると考えられる。柱穴掘形の平面形は長辺70cm×50cmの長方形あるいは一辺50cmの方形を呈し、深さ50～70cmを測る。柱径は15～20cmを測り、柱間隔は1.8m等間であるが、柱配置にはばらつきが見られる。

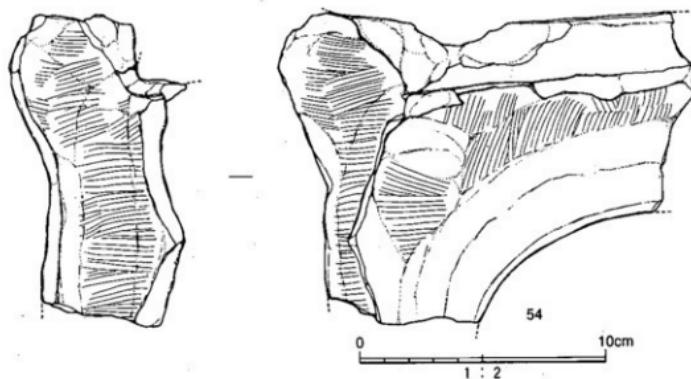
(2) 溝

① 溝 SD01（第6～8図、図版6、17、18）

調査地I区で検出した推定幅1.2～1.5m、深さ40cmを測り、断面形が深いレンズ状を呈する正方位における東西方向の溝である。調査地内における部分的な検出であり、L字状に屈曲する可能性がある。



第7図 溝SD 01出土遺物



第8図 溝SD01出土遺物

出土遺物には土師器坏 (34~38)、高台付坏 (39、40)、皿 (41、42)、高坏 (53)、黒色土器高台付坏 (43~48)、坏 (49、50)、須恵器壺 (51)、高台付坏? (52)、壺 (54) がある。

坏34~37は底部から外方向に直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸くおさめる。35は底部穿孔を受けているのであろうか。いずれも回転台土師器である。この形態の坏には少なくとも3種類の法量分化（口径12cm×器高3.5cm：口径14cm×器高4.0~4.5cm：口径16cm×器高5.0cm）が見られる。

坏38は底部から短く直線的に斜上方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる回転台土師器である。

高台付坏39、40は底部径が8cm以上を測る高台をもつ。共に回転台成形である。

皿41、42は口縁端部が大きく外側に開く形態であり、端部は丸くおさめる回転台土師器である。

なお、坏38、皿41、42には赤色顔料塗彩の痕跡が見られる。

黒色土器43~48は内面黒色処理のA類であり、回転台成形によるものである。44は高台が剥がれている。45~48は底部径が8cm以上を測る大きな高台をもつ。いずれも内面磨滅が著しく不明瞭であるがヘラミガキの痕跡が見られる。

49と50は無高台であり、内面にヘラミガキ、底部外面にヘラケズリが施される。同一個体の可能性がある。43~48と比較して底部の調整状況が異なることから、搬入品模倣であると考えられる。

高坏53は脚柱部であり断面形が七角形を呈する。

壺54の内面および底内面には燃焼に伴う炭化痕跡が見られる。

② 溝 SD02（第6図、図版2）

調査地Ⅱ区およびⅠ区で検出した幅1.0~1.5m、深さ75cmを測り、断面形が深いレンズ状を呈する北東~南東方向の溝である。

③ 溝 SD03（第6図、図版2）

調査地Ⅱ区およびⅠ区で検出した幅80cm~1.2m、深さ25~40cmを測り、断面形が不整U字状を呈する北東~南東方向の溝である。

④ 溝 SD04（第6図、図版2）

調査地Ⅱ区およびⅠ区で検出した幅1.3~1.5m、深さ30~50cmを測り、断面形が不整逆台形を呈する北東~南東方向の溝である。

⑤ 溝 SD05（第6図、図版2）

調査地Ⅱ区で検出した幅60cm、深さ50cmを測り、断面形が不整逆台形を呈する北東~東方向の溝である。

⑥ 溝 SD06（第6図、図版2）

調査地Ⅱ区で検出した幅1.5m、深さ70cmを測り、断面形が不整逆台形を呈する北東~東方向の溝である。

溝SD02~06はいずれも1層下面からの切り込みで新相の可能性が考えられる。少量の弥生時代の遺物が出土しているが、切り込み面との関係において、時期決定は明確ではない。

(3) 土壙

① 土壙 SK01（第6、9、10図、図版7、8、18、19）

調査地Ⅰ区で検出した長辺1.2m×短辺1.0mの平面形がほぼ方形を呈し、深さ15cmを測る方形土壙である。土壙の方位は正方位を指向する。掘形の形状が整っていることから、通常的な土壙とは機能を別にするものなのかもしれない。

出土遺物には土師器壺(55~57)、高台付壺(58)、壺(60、61)、黒色土器椀(59)がある。

壺55、56は底部から斜上方に直線的に立ち上がり口縁端部を丸くおさめる回転台土師器である。口径12.5cm×器高3.5~4.0cmを測る。

壺57は底部からやや丸みをもって立ち上がり口縁端部を丸くおさめる回転台土師器である。

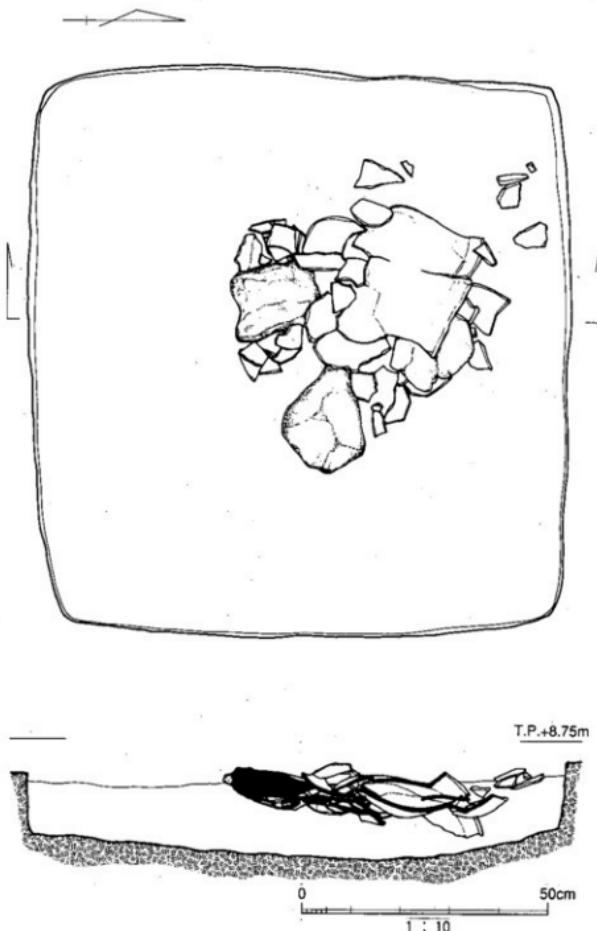
高台付壺58は直線的に斜上方に立ち上がる体部をもつ回転台土師器である。口径14cm×器高4.5cmを測る壺形態に径8.5cmの高台を貼り付ける。

黒色土器椀59は体部が丸みをもつ回転台土師器の内面に黒色処理を施したA類である。体部

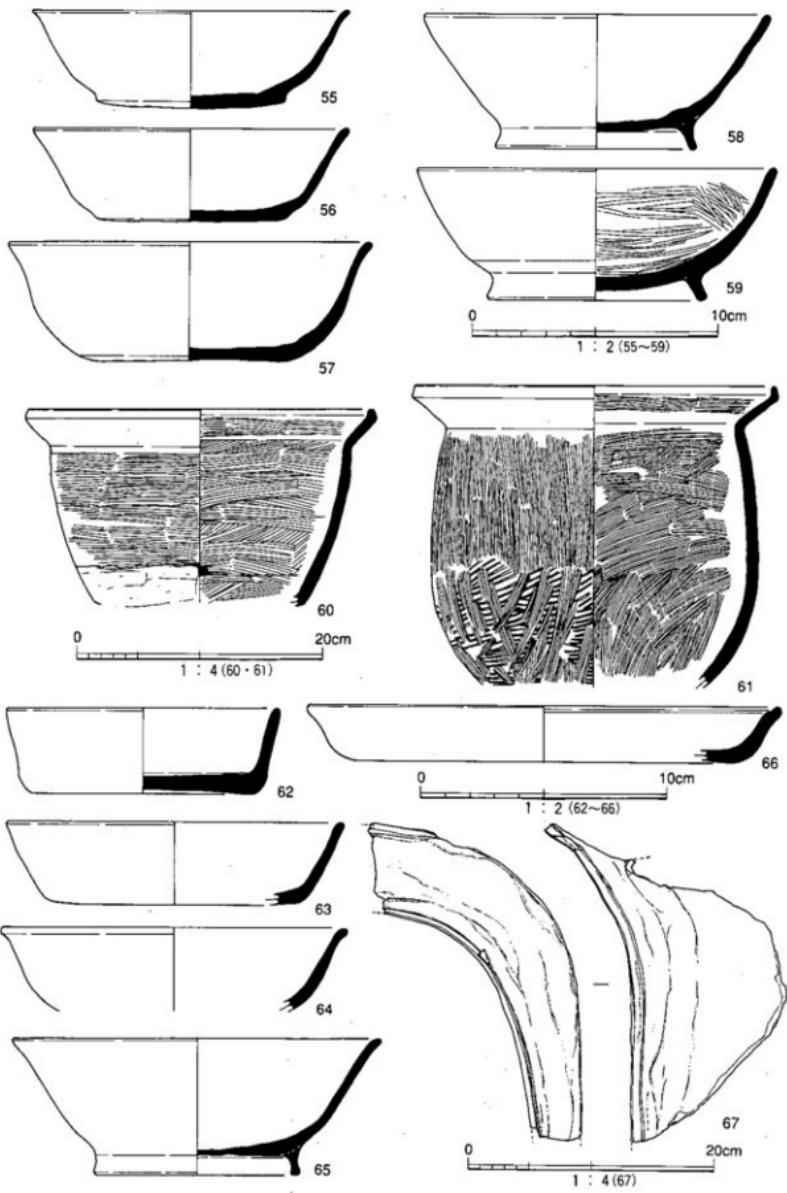
内面には4分割のヘラミガキ+底部には一方向の粗いヘラミガキが施される。

坏形態の法量には(55、56)と(58)さらに(57、59)の三分化が見られる。

堀60、61は体部から「く」字状に屈曲する口縁部をもち、口縁端部を上方に拡張させる。60は口縁部内面および体部内外面に横位ハケ、体部外面下位には横位ヘラケズリが施される。底部は平底を呈する。



第9図 土壌SK01遺物検出状況図

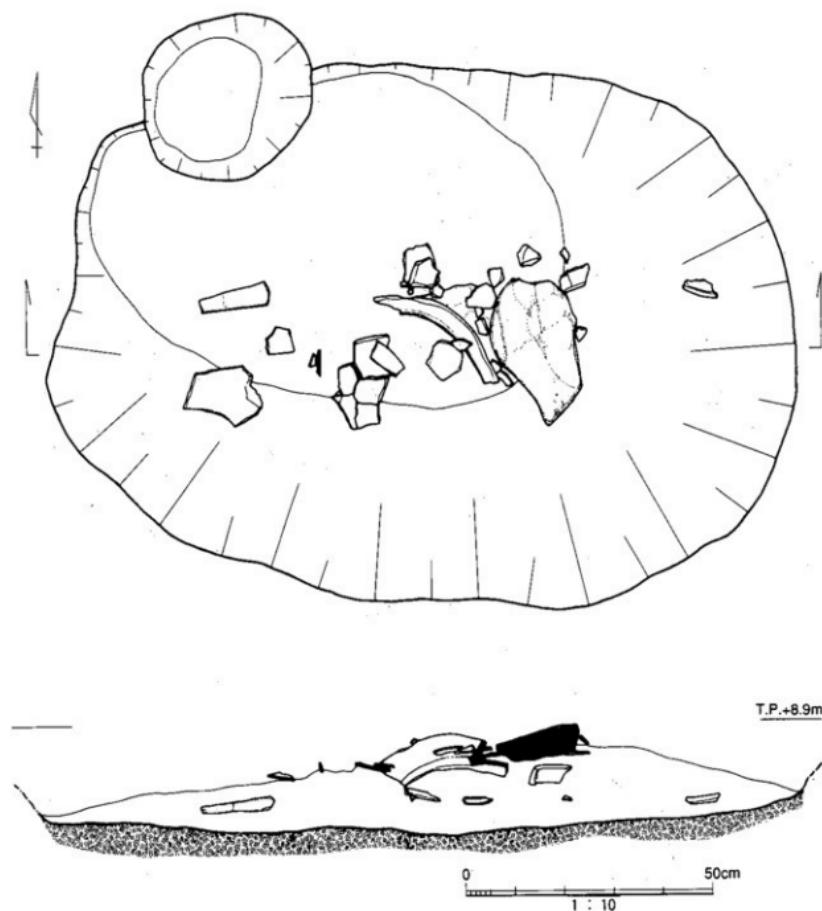


第10図 土壌SK01(55~61)、SK02(62~67)出土遺物

61は口縁部内面および体部内面に横位ハケ、体部外面上半は縦位ハケ、下半にはタタキ+縦位ハケが施される。底部は丸底を呈する。

② 土壌SK02 (第6、10、11図、図版9、20)

調査地I区で検出した長径1.5m×短辺1.0mの平面形が長円形を呈し、深さ20cmを測る土壌



第11図 土壌SK02遺物検出状況図

である。

出土遺物には土師器坏 (62~64)、高台付坏 (65)、皿 (66)、竈 (67) がある。

坏62は口径12cm×器高3.5cmを測り、底部から直立気味に屈曲する回転台土師器である。

坏63、64は口径14cm×器高3.5cmを測り、底部から斜上方に直線的に立ち上がり口縁端部を丸くおさめる回転台土師器である。

高台付坏65は口径15cm×器高4.5cmを測り、体部が斜上方に直線的に立ち上がる坏の底部端に径8.5cmの高台を貼り付ける回転台土師器である。

皿66は口縁端部内面を肥厚させる形態である。

なお、坏62~64、皿66には赤色顔料塗彩の痕跡が見られる。

③ 土壌SK03 (第6、12、14図、図版10、21)

調査地I区で検出した長径2.2m、短径1.2mの平面形が不整長円形を呈し、深さ25cmを測る



第12図 土壌SK03遺物検出状況図

廃棄土壌であると考えられる。

出土遺物には広口壺(68、69)、直口壺(70)、甕(71~73)、高坏(74)がある。

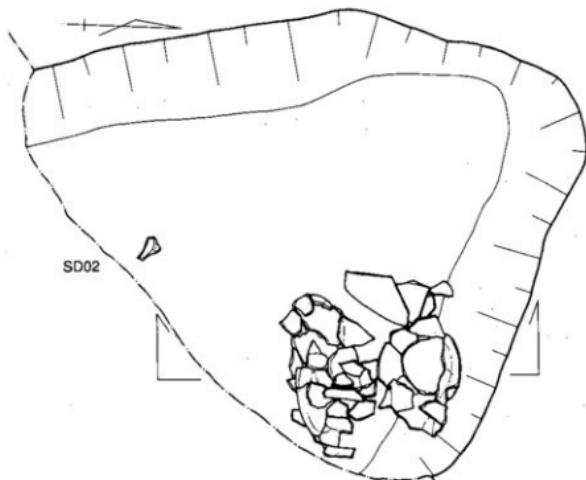
広口壺68は直立する頸部から外反屈曲する口縁部に至り口縁端部を上下に拡張し、端面には幅狭の3条凹線+刺突文が施される。

広口壺69は直立する頸部から緩やかに外反し、口縁端部を上下に拡張し、端面には幅狭の3条凹線+刺突文が施される。頸部には幅狭の11条凹線が施される。

直口壺70はやや外方向に立ち上がる口縁部をもつ。端面は面取る。口縁部に3条凹線+頸部下位に4条の沈線状の凹線がめぐる。

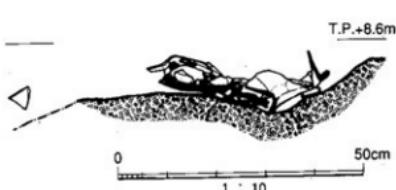
甕71は「く」字状に短く外反する口縁部をもち、端部を面取る。体部外面に縦位ハケ+縦位ヘラミガキ、体部内面に縦位ヘラケズリが施される。

甕72は口縁端部内面を上方に拡張し、端面には3条凹線がめぐる。体部外面に刺突文の痕跡が見られる。



甕73は口縁端部を上下に拡張し、端面には3条凹線+刺突文が施される。体部外面には縦位ハケ+刺突文、体部内面はユビオサエが施される。

高坏74は椀状坏部を呈し、口縁部下に幅狭の2条凹線がめぐる。体部内外面には横位ヘラミガキが施される。

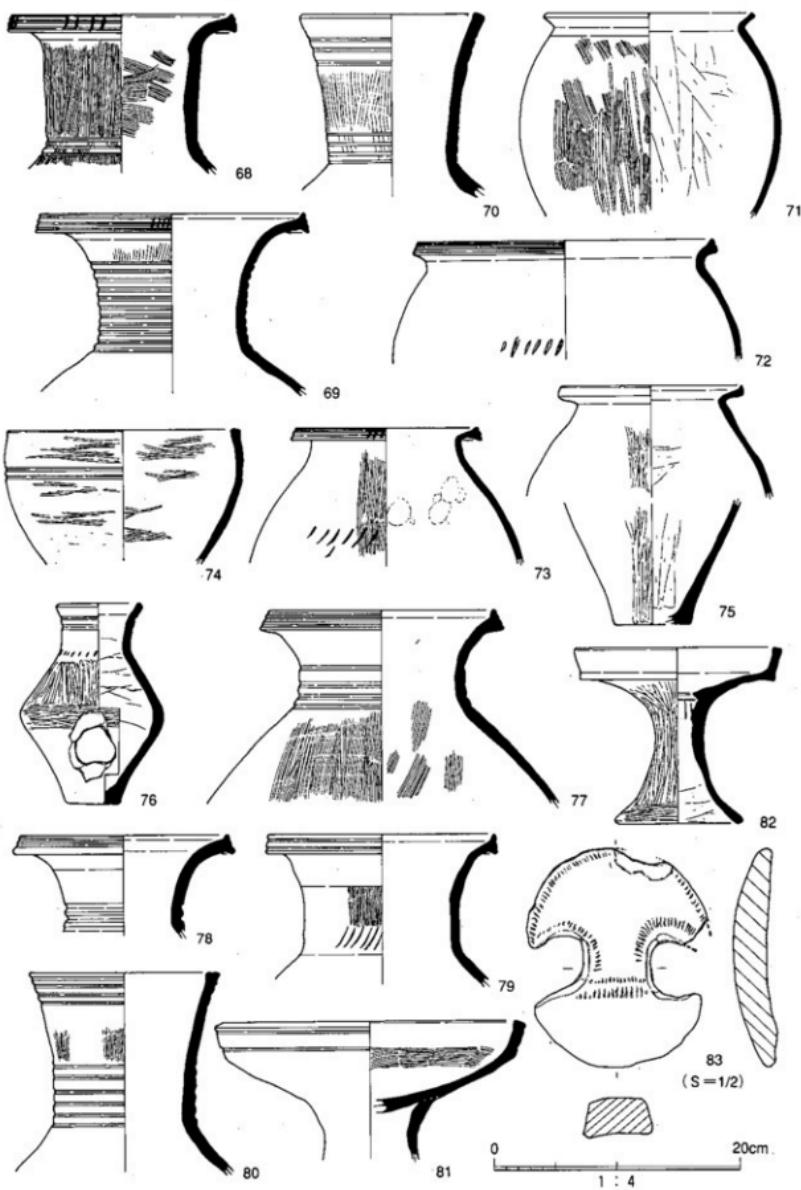


第13図 土壌SK04遺物検出状況図

④ 土壌SK04

(第6、13、14、
図版11、22)

調査地Ⅱ区で検出
した溝SD02により
壊されているため、
平面形の形状につい



第14図 土壌SK 03(68~74)、SK 04(75)、SL 01(76~81)、SJ 01(82)、3層(83)出土遺物

ては明確ではない。推定長径 1.8×1.2 mの不整長円形の約1/2が残存しているのであろうか。
出土遺物には壺(75)が出土している。

壺75は口縁端部を「く」字状に屈曲させ、口縁端部を上方に拡張させ、端面は平坦である。
体部外表面縦位ハケ後、縦位ヘラミガキ、体部内面上位は横位ヘラケズリ、下位は縦位ヘラケズ
リが施される。

(4) 周溝墓（方形・円形）

調査地Ⅲ区において周溝墓（方形・円形）を6基確認している。検出状況での形態および規
模の確認調査にとどめ現状保存の措置を講じた。なおSL01については遺構検出時に周溝上位
から多量の遺物出土が認められたので、遺物取り上げを行っている。

① 周溝墓 SL01（第6、14図、図版3、22）

調査地外へ広がる方形周溝墓であり、幅1.0~2.5mの周溝で区画される。隣接して長辺2.5m
短辺1mの平面形が長方形を呈する土塚墓（SJ01）が見られる。区画外埋葬であろうか。

SL01の出土遺物には短頸壺(76)、広口壺(77~79)、直口壺(80)、高壺(81)がある。
またSJ01から高壺(82)がある。

短頸壺76は口頸部が緩やかに外方向に立ち上がり、口縁部に2条凹線、体部境界に刺突文を
めぐらす。体部外面上位に縦位ヘラミガキ、体部屈曲の中位には横位ヘラミガキが施される。
体部下位に穿孔を受ける。

広口壺77は短く直立する頸部から外反する口縁部をもち、口縁端部内面を拡張し、端面に3
条凹線をめぐらす。頸部に幅狭の4条凹線、体部内外面に細かなハケが施される。

広口壺78は体部屈曲から外反する口頸部をもち、口縁端部内外面を拡張させ、端面に2条凹
線がめぐる。頸部下位に3条凹線が施される。

広口壺79は直立する頸部から外反する口縁部をもち、口縁端部を上下に拡張させ、端面に極
細の2条凹線がめぐる。頸部外面に縦位ハケ、頸部下位に刺突文が施される。

直口壺80は外方向に直線的に立ち上がる口頸部をもち、口縁部端面はわずかに凹面を呈する
口縁部4条+頸部下位に6条凹線がめぐる。

高壺81は皿形化した壺の体部境界部に1条凹線がめぐる。円盤充填による接合法である。

高壺82は皿形化した壺をもち、壺底部から短く直立する口縁部をもつ。口縁端部の断面形は
方形を呈する。壺体部外側～脚柱部に縦位ヘラミガキ、脚部に横位ヘラミガキが施される。接
合は円盤充填によるものであり、壺底部に穿孔を受ける。

② 周溝墓 SL02（第6図、図版3）

平面形が長辺 6.5×4.5 mの長方形を呈し、幅1mの四隅が収束する溝で区画する。区画中央

部に平面形が長辺1.9×90cmの長方形を呈する土壙が見られる。主体部であろうか。

③ 周溝墓 SL03 (第6、17図、図版3、22)

平面形が径2mの円形を呈し、幅50cmの収束する周溝により区画される。

遺構検出中（包含層：3層）に顔の表現が成されていない分銅形土製品（83）が出土している。

④ 周溝墓 SL04 (第6図、図版3)

調査地外へ広がる周溝墓であり、平面形が径3mの円形を呈すると想定され、幅60cmの周溝により区画される。

⑤ 周溝墓 SL05 (第6図、図版3)

平面形が長径3m、短径2.5mの平面形が長円形を呈し、幅50cmの収束する周溝により区画される。

⑥ 周溝墓 SL06 (第6図、図版3)

調査地外へ広がる周溝墓であり、幅1.5～2.5mの周溝により区画される。

6 小結

調査地周辺には弥生時代中期～後期・庄内式併行期の集落が広がるものと想定される。後期・庄内式併行期の竪穴住居跡の検出は、西隣する四国電力国府変電所を中心とする当該期の集落の広がりとして捉えられ、また、中期の墓域を構成する周溝墓群は「矢野遺跡」では初見事例であり、近接地域において集落の中心を構成する住居跡群の存在が想定される。なお、分銅形土製品は包含層（3層）出土である。遺構出土例ではないが、出土地が墓域であることからその用途に関して今後新たな資料と成り得るだろうか。

北東～南東方向に並走する5条の溝（SD02～06）は、同時期に同機能を果たしていたものと考えられる。時期的な問題として、出土遺物には弥生時代の遺物が見られるが、層位的には（2～3-a層）を切り込むことから混在の可能性があり、比較的新しい時期の溝群である可能性が強い。中世以降との想定もなされるが、調査地周辺域においてすでにこの時期には土地整備として進められていたであろうN-10°～Wの条里地割に合致しない点が問題である。

阿波國府関連遺構の検出は、予測とは異なる結果に至っている。それは、平成8年度調査時に確認された柱穴群が構成するであろう構造物跡の広がりが充分に確認されなかつたことによる。ただ、掘立柱建物跡SH06の検出は、南北方向における数棟の建物跡群の存在を確証している。また、溝SD01や土壙SK01は遺構方位が正方位指向でありながら、出土遺物の示す時

期相は10世紀代に至るものであり、8世紀中葉の掘立柱建物跡に始まるこの地域（方1町内）の遺構存続時期は少なくとも200年間もの長期間に及ぶものとされる。ただ、掘立柱建物跡の柱穴には切り合い関係が見られないことから、建て替えの可能性は考えられず、この期間、建物が本来の機能を継続し続けていたかについては疑問が残る。また、この地域ではN-10°～Wの土地整備の規制から外されている可能性が高く、その背後にはやはりこの地域に存在する建物跡群の性格の特殊性およびこの空間の土地利用には、他地域とは異なる事情を見出すことができるのではないだろうか。

出土遺物にはについては、在地産の回転台土師器が主体を占める状況である⁴⁶。土墳SK02(62、63)は須恵器壺形態を模倣した初現期の典型的な回転台土師器であり、8世紀前半に位置付けられるものであろう。ただSK02においては、壺(64)、高台付壺(65)のように、従来より9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる回転台土師器と共に伴している⁴⁷。これが単なる混在状況を示しているものなのか、あるいは別の意味をもつものなのか、土器編年を含めた詳細な検討が必要とされる。

正方形地割の残存地域であり、奈良時代の掘立柱建物跡の広がりが想定される地域（方1町）での調査にはまだまだ数多くの問題が残されている。

(注)

- (1) 福井 好行「阿波の国府と其附近の条里」『徳島大学学芸学部紀要』9、1959年。
- (2) 木下 良「国府と条里との関係について」『史林』50巻5号、1967年。
- (3) 藤岡謙二郎「国府」1969年。
- (4) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第1次調査概要－1982年度－』1983年。
- (5) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第2次調査概要－1983年度－』1984年。
- (6) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第3次調査概要－1984年度－』1985年。
- (7) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第4次調査概要－1985年度－』1986年。
- (8) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第5次調査概要－1986年度－』1987年。
- (9) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第6次調査概要－1987年度－』1988年。
- (10) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第7次調査概要－1988年度－』1989年。
- (11) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第8次調査概要－1989年度－』1990年。
- (12) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第9次調査概要－1990年度－』1991年。
- (13) 徳島市教育委員会『阿波国府跡第10次調査概要－1991年度－』1992年。
- (14) 徳島県埋蔵文化財センター「最古の税課木簡－徳島県親音寺遺跡」全国埋文協会報No50 1998年。
- (15) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』8、1998年。
- (16) 回転代土師器の初現期を示す資料は、庄遺跡での調査資料（徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』6、1996年）がある。
- (17) 阿波国府跡第6次調査溝SD29出土遺物は9世紀末～10世紀初頭の基準資料であり、これらの資料との対比による。

写 真 図 版



調査地 I 区 遺構検出状況

東より



調査地Ⅱ区 検出遺構

南より



北より



調査地 1-A 挖立柱建物跡 SH06（正方位）と周辺条里地割（N-10°-W） 南より



掘立柱建物跡 SH06検出状況

南より



掘立柱建物跡 SH06桁行柱穴検出状況

南より



掘立柱建物跡 SH06采行柱穴検出状況

西より



調査地 I 区 溝 SD01検出状況

南東より



溝 SD01遺物検出状況

南西より



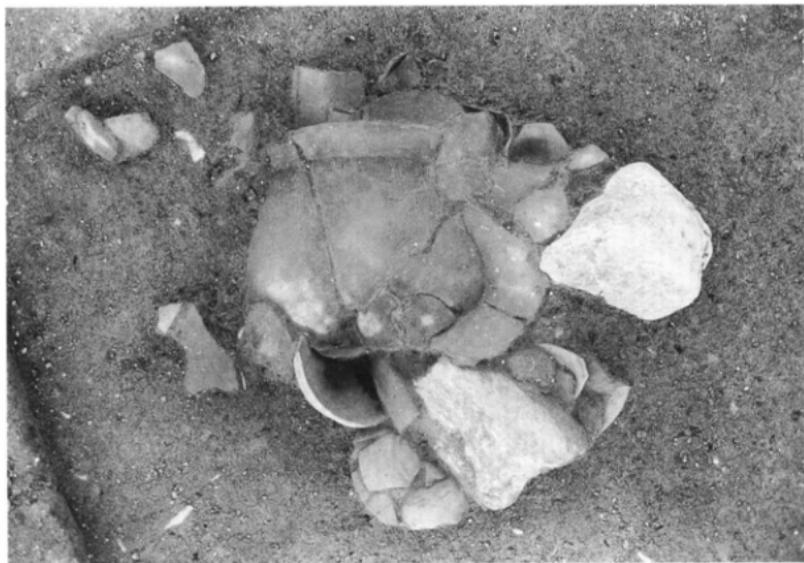
調査地 I 区 土壌 SK 01 検出状況

西より



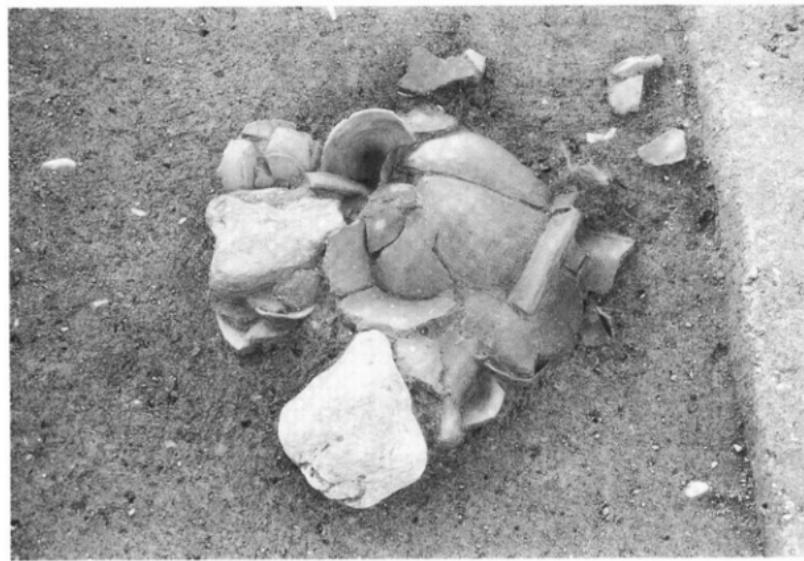
土壌 SK 01 検出状況

東より



土壤 SK 01 遺物検出状況

南より



土壤 SK 01 遺物検出状況

東より



調査地 I 区 土壌 SK 02検出状況

西より



土壤 SK 02遺物検出状況

西より



調査地 I 区 土壌 SK 03 遺物検出状況

南西より



土壌 SK 03 遺物検出状況

北西より



調査地Ⅱ区 土壌SK04遺物検出状況

北より



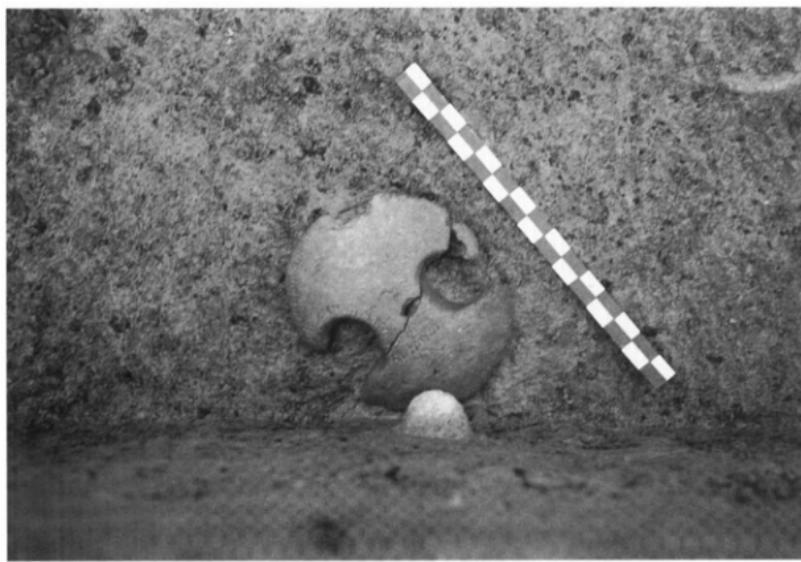
土壤SK04遺物検出状況

西より



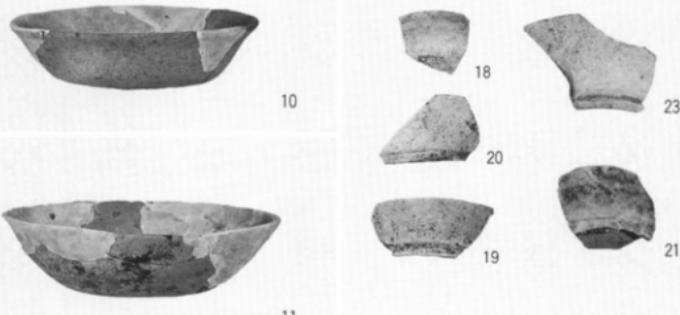
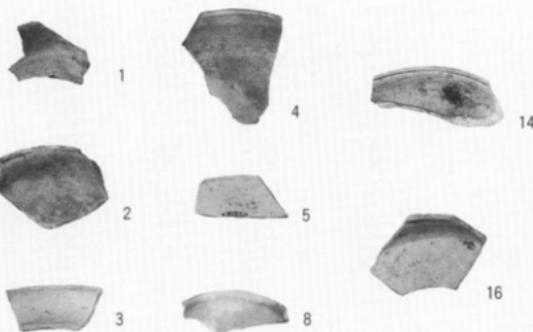
調査地Ⅲ区 分銅形土製品検出状況

北西より



分銅形土製品検出状況

北東より



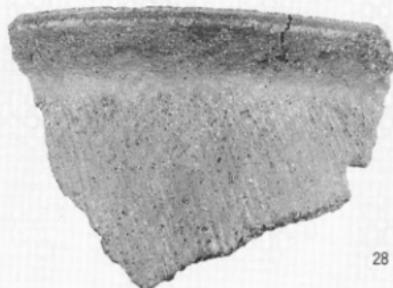
出土遺物（1・2層）



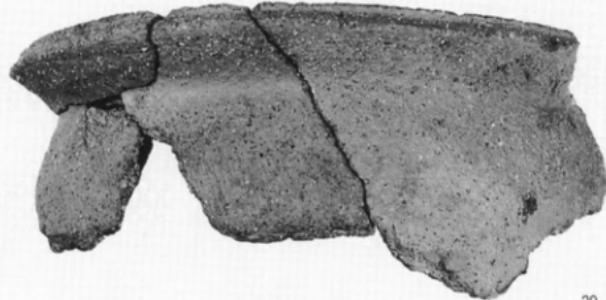
26



27



28



29

出土遺物（1・2層）



32



30



33



31

出土遺物（1・2層）



a



b



c

出土遺物（1・2層）



34



39



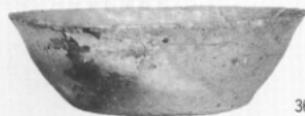
40



35



44



36



43



47



45



46



48



37



43



47



46



45



38



41



42

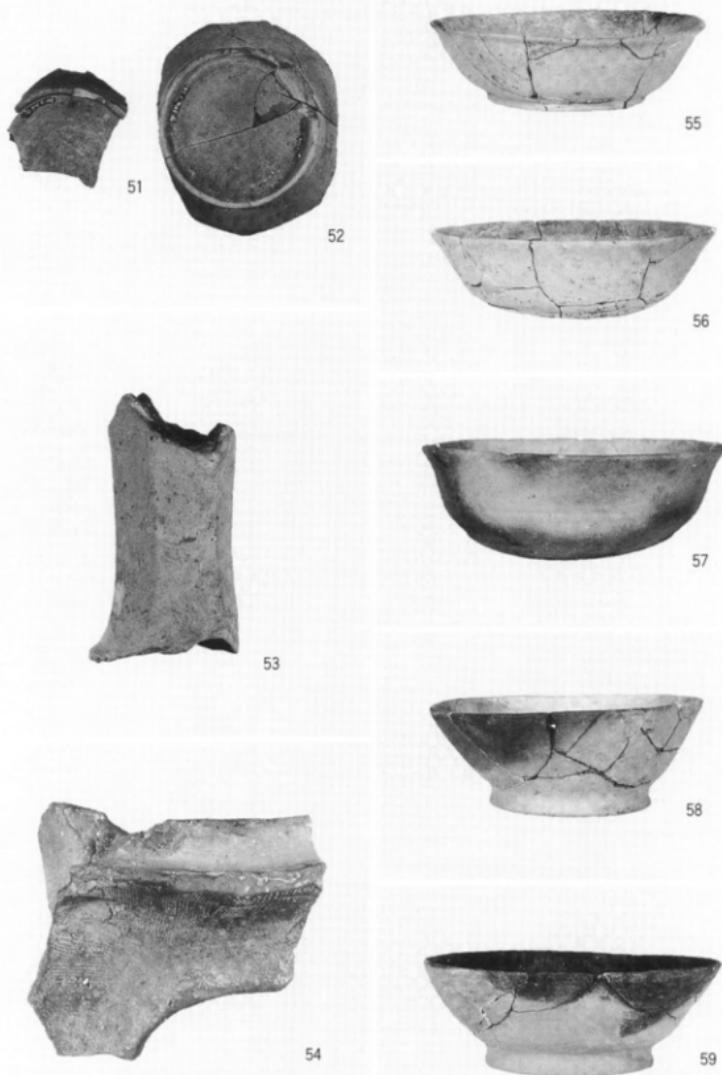


49



50

溝 SD 01出土遺物



溝 SD 01 (51~54)、土壤 SK 01 (55~59) 出土遺物



60



61

土壤 SK 01 出土遺物



62



64



63



65



66



67

土壤 SK 02出土遺物



68



70



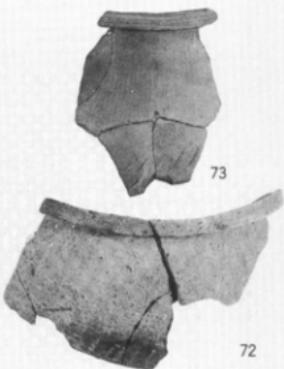
69



74



71



72

土壤 SK 03出土遺物



76



77



78



75



79



82



81



83

土壤 SK 04 (75)、周溝墓 SL 01 (76~81)、土壤墓 SJ 01 (82)、3層(83) 出土遺物

阿波国府跡発掘調査報告

1999. 3. 31

編集 徳島市教育委員会社会教育課
発行 徳島市教育委員会
印刷 株式会社教育出版センター